

スチーブン・クレインと英国

上野利雄

I クレインの Life

スチーブン・クレイン (Stephen Crane) の生まれた家は、教養高い立派な家柄であった。1871年11月1日、New Jersey, Newark の Mulberry Place で14番目の末子として生まれた時、父 Jonathan Townley Crane 博士は50才であった。父クレイン博士 (1819年—1880年) は、the College of New Jersey (後のプリンストン大学) を卒業し、教師、高校長、説教師、牧師を歴任していて、著書も数多く出版されていた。母 Mary Hellen Peck Crane (1827年—1891年) も大学卒で、有名なメソジスト派の牧師 George Peck の娘であった。

1880年、クレイン博士の死後は、母が教会関係の記事や、ニューヨーク・トリビュン及びフィラデルフィア・プレスの記事を書いたり、各地で講演をしたりして、一家を支えていた。スチーブン・クレインはこうした literacy の環境下であって、幼時より文章に非常な関心を示していた。

1876年一家は New Jersey の Paterson に移り、父クレイン博士は、Cross Street 教会の牧師となり、1878年には New York の Port Jervis にある Drew Church の牧師となった。この Port Jervis 及びその附近が “The Third Violet”, “The Monster”, “Whilomville Stories” における作品の地方色となっている。

1882年一家は New Jersey の Asbury Park に移転し、4th Avenue 508番地に落着いた。スチーブン・クレインはこの市の学校に通ったと考えられる。幼年時代より少年時代にかけて、彼の心の中で文学の野心が芽ばえたのは、姉の Agnes に負うところが大きい。姉 Agnes はクレインが生まれた時15才であったが、その後多忙な母の代りに家事を引き受けると共に、末弟クレインの養育に専念し、深い愛情をそそいだ。クレインに文字を教え、詩や文学を教えたのも、この才能ある姉 Agnes であった。1884年、28才の若さで、この姉の死ぬまでがクレインにとって最も幸せの時期であったに違いない。

1885年から1887年の2年間は、父が校長をしたことのある Pennington Seminary (高校) で学んだ。父クレイン博士は1849年から1858年の十年間この学校長であった。この頃すでに創作欲は旺盛で、最初のものと考えられる “Uncle Jake and the Bell Handle” を書いている。

1888年1月、Claverack の Hudson River Institute (後の Claverack 大学) に入学、1890年6月まで在籍したが、この間に同校の “Vidette” に彼の最初のスケッチである “Henry M Stanley” を発表している。この学校は陸軍の予備士官学校で、学科に興味を示さなかったクレ

インも、軍人としての心構え、規律など身につけ、後年の“The Red Badge of Courage”を書く際に大きな参考となった事は確である。又在学中南北戦争で the 34th New York Volunteers の従軍牧師で、丁度歴史教師であった、John B. Van Petten から南北戦争の話の色々聞いた。アンティータムの戦い (the Battle of Antietam), 恐ろしい砲火の中での大敗走、敗走中に34軍の半数近くが戦死したこと、最後まで軍旗を死守した旗手の話など、後年、偉大な戦争文学“The Red Badge of Courage”を生む基礎となった。

1890年9月、Lafayette College に入学したが、勉強よりボクシングに熱中し、学期末には勉強怠慢の理由で退学を勧告された。家族一同相談の結果、母の伯父 Jesse Peck 司教が設立者の一人である Syracuse 大学に、1891年1月、転入学した。同時にクレインはニューヨークトリビュンの記者をしたり、Asbury Park で兄 Townley の経営する News Bureau の手伝いをしていた。

Syracuse 大学でも、ヘラルドの5月号に、最初のストーリー“The King’s Favor”を発表し、この頃より“Maggie: A Girl of the Streets”を考えはじめた。この大学においても、学科よりも大学野球に熱中し、野球では常にヒーローであった。然し学年の終わった6月、“A”は、英文学の一つだけであった。この点に関し、クレイン夫人よりの問い合せに、ラテン語の Frank Smalley 教授は1900年8月2日の返信で次のように述べている。

註①
“He was not inclined to be very studious and I find he has credit in only one subject and in that he has our highest mark, of course, that study is English literature. He devoted himself to athletic sports with ardor, especially base-ball and was our finest player”.

12月7日、母の死があり、この大学も一年あまりで退学してしまった。“Maggie”については、クリスマス前の2日間で書きあげたと友人への手紙で述べているが、大体の構成はかなり以前より出来ていたのである。

友人達は“Maggie”の内容に驚き、だれも出版してくれないだろうと心配した。事実、クレイン自身“Maggie”を出版しようと運動したが、1892年3月 Century のリチャード・ギルダーから断られたのをはじめ、どこの出版社も引き受け手がなく、11月に兄ウィリアムから1000ドル借金して“Maggie”を自費出版した。この“Maggie”は1893年3月、Johnstone Smith の筆名で1,100部印刷した。この発表でガーランド (Hamlin Garland) はクレインを賞賛し、6月の“The Arena”に好意的批評をのせ、又ハウエルズ (William Dean Howells) は出版社に“Maggie”の出版をすすめてくれたが、一般にうけず、クレインが学友、Frank W. Noxton に語っている通り、サクラを使って電車の中で読ませたが失敗に終わった。初版“Maggie”は黄色のカバーに大きな黒字で印刷され、よく目立つように4人のサクラが終日、電車の中で向い合って読書に熱中のふりをし、大いにマギー熱を広めようとしたが、1890年代のアメリカの“お上品主義”には認めて貰うことは出来なかった。(自費出版で一部50セントの初版は当時数冊しか売れなかったが、1922年には一部250ドルの値がついて売れた)。

こうした失敗はあったが、その頃すでに構想をねっていた “The Red Badge of Courage” の発表と共に、クレインは一躍名声を博することになる。

この “The Red Badge of Courage” は最初、18,000 語に要約したものを90ドルで、1894年11月、ジョンソン、シンディケートに売り、12月3日から8日まで、フィラデルフィアプレスに掲載された。大好評を得て、その後すくなくとも40位の他の新聞にも取り上げられた。1895年 Appleton によって 50,000 語の complete version が出版されるや忽ちベストセラーとなり、1897年までに14版を重ねた。これと共に “Maggie” の再版、短篇小説やスケッチなど The Arena, ニューヨークプレス、トリビュアンなどに掲載された。1895年5月、自由詩 “The Black Riders” を出版、これは後の Imagist Poets に大きな影響を与えた。

1900年6月5日、ドイツの Black Forest で29才にならぬ若さで死ぬまでの最後の三年はイギリスに住み、多くの有名文人を親友に得て、多くの作品を書き残している。

imagination [に驚くべき才能を有し、ユニークな作品を書いた天才クレインのアメリカ文学における位置は、近年になってははっきりしてきた。ドーレン (Carl Van Doren) は “The American Novel” の中で「現在アメリカ文学はクレインにはじまった」とし、スピラー (R. E. Spiller) らの編集した “Literary History of the United States” の中では「Maggie の再版と共に現在アメリカ文学は誕生した」と述べられている。又カウリー (Malcolm Cowley) は “The Literary Situation” の中で「アメリカにおける自然主義はクレインの “Maggie” と共に現れた」と述べている如く、クレインはアメリカに於ける自然主義という見出しの下で論じられていることは間違いない。然しクレインの特質を考えると、自然主義だけの範囲に彼をおくことは出来ない。

この点、ケイデイ教授の次の言葉が正しい見方のように考えられる。

^{註③} “He was any kind of an “—ist” available to him from the weather of his times because he was investigating, experimenting with it all and trying to find out just which best suited him. But he was not any of them, really, because he had not settled on any. He did an astonishing amount of brilliant work in various styles, from various view points. He overpowered all by the force of his own imagination’s way”.

II クレインの渡英

すでに述べた通り、クレインは “The Red Badge of Courage” で激賞をうけ、名声大いにあがって、出版社は競って彼の作品を出版しようとし、新聞、雑誌も又、彼のスケッチや、短篇、随筆、記事などを連続的に掲載した。

では何故クレインはアメリカを出なければならなかったのか。^{註④} 「社会の除け者たちと交際する男、下層生活に特別な関心をもつ男、女を買うために借金する男、ポーカーに夢中になる男、文なしの酒呑み男、満足な大学生活をせず、野球に熱中した男」といった私生活に対する根もない

悪評があったが、クレインはそんなことを気にする男ではなかった。事実ではない多くの悪評にも、クレインは一つの弁解も抗議もせず、平然としていたのであるから、この事がアメリカを去る理由ではなかった。或は又、

“Personally I like my little book of poems, *The Black Riders* better than I do *The Red Badge*. The reason is, I suppose, that the former is the more ambitious effort.”

としてクレインが愛した詩が不評で、新聞でからかわれたりして、不愉快な目にあったりしたが、これが直接クレインを外国に追いやった理由でもない。クレインが母国アメリカを離れた最大の理由は、警察の迫害であった。

1896年9月、売春の罪で逮捕された一人の女性、ドラ・クラーク (Dora Clark) (20才) の無罪を信じ、彼女を弁護し、警察から守ったため、ニューヨーク警察の反感を買ってしまった。又ニューヨークの刑事たちの腐敗する姿を書いたり、非難したりして、益々彼はニューヨークにいられなくなってしまった。その迫害は警察が彼をニューヨークから追い出したといえる程ひどいものであった。

同年11月フロリダのジャクソンビルでクレインは、Cora Howorth Murphy Stewart, 別名、Cora Taylor と会い、二人は恋におちた。Cora は良家の出身であったが、クレイン同様、勇氣ある反逆の徒で、ボストンの“お上品主義”に反対していた。彼女はニューヨークで Murphy と結婚、そして離婚、ロンドンで、ヴィクトリア王朝の軍人である、Donald Stewart 大尉と再婚したが、彼が植民地勤務になったとき、別居して一人フロリダのジャクソンビルに来て、商売をはじめていた。彼女は高級な“夢のホテル” (Hotel de Dream) と高級ナイトクラブの経営者であった。このホテルは日本の(待合+温泉マーク)といったものであった。クレインは彼女の中に趣味のよさや知性のほかに文学的才能や活力などを見出し、二人は互にひかれ合って固く結ばれていった。Cora は事実上別居はしていたが、夫の反対から離婚はどうしても出来なかった。法律的に認められないまま、1897年4月、二人はギリシャへ行った。4月17日布告された。“Greco-Turkish War” は、クレインにとって、“*The Red Badge of Courage*” が戦闘において、正しかったか否か確認のよいチャンスであった。特派員としてギリシャに渡ったクレインは、戦争そのものは5月20日には終結となり短期間であったが、13の dispatches を書き(そのうち二、三は Cora のものといわれる)大変好評であった。又戦闘と人間心理について、クレイン自身の imagination そのものであったことを知り、大いに満足し友人へは“*The Red Badge is all right*”. と書いている。

ギリシャから英国へ渡った理由は色々考えられるが、二人にとって英国がよき避難所であったことは明瞭である。英国では、クレインを不愉快にする新聞も、迫害する警察もなかった。それどころか、彼の作品はアメリカよりも英国では、より高く、より正しく評価をうけていた。出版社も、作家たちも、クレインとの会見を望み、英国永住のための援助を申し出ていた。Heinemann のパートナーである Sidney Pawling は1896年12月4日、クレインに宛てて次のように書いている。

^{註②}
“We think so highly of your work—of its virility, actuality, and literary distinction that we have been pleased to take special pains to place it prominently before the British public.”

Ⅲ 英国における “The Red Badge of Courage”

“The Red Badge of Courage” が三ヶ月間で5版を重ねるベストセラーになったことにクレインは大変喜び、この成功で自信をつけたのである。クレインは1896年1月2日、John N. Hilliard への手紙で次のように述べている。

^{註①}
“I have only one pride and that is that the English edition of the Red Badge of Courage has received [sic] with great praise by the English reviewers. I’m proud of this simply because the remote people would seem more just and hard to win”.

勿論 H. D. Traill の「半面の真理だ、マギーほどのあくどさはないが、この作品は決して realistic ではない。作者は一度も戦争経験がないのだから」といった二、三の冷たい批評はあったが、全般的に英国での批評は大変好意的で熱狂的なものであった。「トルストイよりも強烈で、Merimée よりも想像力に富み、キプリングよりも確実で、戦争描写においては、最高の作家である」というのが全体としてみて英国の “The Red Badge of Courage” の批評であった。

Saturday Review では1896年1月4日、翌週はクレインをとりあげて大きく予告し、1月11日には、上記のような激賞の外「クレインがこうした作品中の場面に経験があったかどうか分らないが、極めて生き生きとした詳細な描写は、読者にとって、経験があったとしか考えられない。もしこの作品が、本当にイマジネーションの生んだ作品なら、彼のリアリズムは全く奇跡以外の何物でもない」とクレインの imagination の力に敬服している。又 Academy でも、「一頁一頁が兵士の告白であり、一行一行に戦乱の煙がただよう」と賞賛し、生命に対する正しい分析、一個人の兵士にとって戦争の意味するものを鋭くついている最高作品だとしている。

当時人気のあった作家 H. B. Marriot-Watson は Pall Mall に “The Red Badge of Courage” の批評を書き、これこそ ‘The Heart of a Soldier’ だとし、クレインの戦場における人間感情の鋭い分析を統合した才能と洞察力を全く天才のものであると高く評価した。

著名な学者であり、政治家であり、又退役軍人で国防次官もつとめ、数多くの戦闘経験を持ち、更にグラント将軍とも知己の George Wyndham は、クレインの戦闘場面の正確さ、小説技法の天才的能力、すぐれたイマジネーションに深く心をうたれた。英国で “The Red Badge of Courage” が出た翌日、友人へ次のように手紙を書いている。

“I want you to buy and read the ‘Red Badge of Courage’ by Stephen Crane. I have just reviewed it for the ‘New Review’ of January with enthusiasm”.

激賞の essay を New Review に1896年1月書いた Wyndham のものは後になって、“The Introduction to Crane’s Pictures of War” として Heinemann より出版された。

^{註②} “The best story of the battle. Crane’s work proved that inexperienced creative artists wrote better novels than trained correspondents” といった英国文人たちの批評はすべてクレインに自信と喜びを与えた。読む人すべてが、クレインが戦争に深い豊富な経験を持っているとしか信じられない、この “The Red Badge of Courage” のリアリズムを、クレインは想像力を駆使して書いた作品だけに、又事実少数とはいえ、^{註③} 「人間は戦闘においてはもっと敏捷になるものだ」という軍人の意見もあったので、Illustrated London News に掲載された次の批評には更に喜こんだ。

^{註④} “General Sir Evelyn Wood (当時高級副官で後陸軍元師になった)——than whom a braver man never lived——has expressed the opinion that Mr. Crane’s work is quite the finest thing in that line that has ever been done, and that the intuitions of the boy who has never seen war are worth far more than the experiences of any writer known to him, even though he may have been in the thick of the fiercest battle”.

IV 英国におけるクレイン

英国では Cora の件についても何のゴシップもおきなかった。クレインが妻として紹介した通り、ごく自然に、クレイン夫人として受け入れられ、尊敬された。このことは、クレインが会った英国の新聞、雑誌の記者、或は又、作家たちが、アメリカの同業者たちよりも、そうしたことに好奇心がすくなかったこともあるが、その当時の英国の社会は、ハロルド、フレデリック (Harold Frederic) の奇妙な二重生活を受けいれている如く、大変寛大自由なものであった。コンラッド (Joseph Conrad) は諸国を放浪した作家であったし、ヘンリージェイムズ (Henry James) は独身、フォード、マドックス、フォード (Ford Madox Ford) やウエルズ (H. G. Wells) は別居したり、離婚したりしていた。アメリカは “お上品主義” のため “Maggie” を受けいれなかったが、英国では圧迫されるような道徳的雰囲気から解放された。英国はクレインにその持てる知性や才能を十二分に発揮する自由を与えたのである。

Thomas Beer は “Stephen Crane” の中で次のように述べている。

^{註①} “You can have an idea without being sent to court for it”.

当時の英国は、新しい文学手法に対する関心が強く、新しい思想も自由に受け入れていた。従ってパリから来た Ernest Dowson、ポーランドから来たコンラッドと同じく、クレインにも自由が与えられたのである。

クレイン自身も、友人の John H. Hilliard への手紙で^{註②} 「こちらでは有難いことに、人間を犬の如くには扱わない。賞賛も非難も、公平に正しく行われる」と述べている。

クレインは Surrey に居を定めた。はじめは Oxted の Ravensbrook に住み、キューバから帰った後は、広大な Brede Place へ移った。この Brede Place で Cora とクレインは友人仲間をもてなし、多くの傑作を書き、又借金に追われて駄作も書いた。

英国こそクレインが文学上の成長を示す深い友情を得た土地であった。勿論アメリカを去る前、多くの作家たちを知っていたが、それらの人々と、英国での友人との間には大きな相違があった。友情をもって交際したアメリカの作家たち、Repley Hitchcock, Richard Harding Davis, James Gibbons Huneker らはシリアスなアーティストとは言い難い。又ガーランドやハウエルズにとって、クレインは被保護者的な存在であった。英国におけるクレインは多くの才能ある有名人との真の、自由な親交を得たのである。コンラッドやジェームズとは師弟としてではなく、年齢の差はあっても、作家対作家として、芸術家対芸術家として、心を許した友情を交えることが出来た。

“The Red Badge of Courage” の英国におけるベストセラーや、熱狂的な評論などによって、クレインの人間像を益々魅力あるものに、興味深いものにしたことも事実だが、クレインとコンラッド、ジェームズ、フォード、マドックス・フォード、ウエルズとの密なる友情には特別なものがあつた。彼らは皆クレインのすぐれた才能を賛美し、彼の人間性を愛した。他の作家たちにとって不可思議なクレインの源泉も、コンラッドの有名な言葉 “Stephen Crane was ‘one of us’ ” が示す通り、互に理解出来ていた。又彼らの特別な友情には別の見方も出来る。五人共それぞれお互に、二、三マイル以内に住み、五人の中三人は自国を逃れて英国へ来た人々であり、

又五人共が、或る意味では、社会的、倫理的、及び文学的に主流からはずれていたとも考えられよう。

Karl Harriman はクレインの死ぬ数週間前、クレインにとって英国はどうであったかを次のように述べている。

「^{註③}スチーブン・クレインが英国に来て住んだことが、とりもなおさず、彼の成功である。英国ではアメリカ人、スチーブン・クレイン程高く評価される作家はいない。彼の友人は作家として、芸術家として、すべて有名な人たちばかりである。」

勿論アメリカでもクレインは才能ある青年作家として注目されていた。然し英国では、注目だけでなく、大作家として研究されていたのである。

英国の作家たちの間で、クレインが大変高い地位を占めた理由として、ハロルド・フレデリックは「^{註④}当時の英国の作家でスチーブン・クレインのもつ天性のすばらしい才能や、深い洞察力に達し得た者は一人もいない」と述べている。

1896年、“The Red Badge of Courage” を激賛した批評を、ニューヨークタイムズに送ったフレデリックもクレインの親友となり、1898年死ぬまで、深い理解と暖かい友情をクレインにそそいでいた。フレデリック家とクレイン家は、コンラッド家と同じように、楽しい交りを受け、夕食に招きあうばかりでなく各地の旅行も共にした。クレインに “Active Service” を書くことを勧めたのもこのフレデリックであった。彼はクレインを社交界や、著名な作家たちに紹介すると共に、クレインの文学的才能を賛美し続けた一人である。

クレインの突然の発病に、懸命に医者を探して自転車を走らす、H. G. ウエルズの姿、クレイ

ンに転地をすすめるガーネット，ローズガーデンで，つきぬ文学談に花を咲かせる F. M. フォード，クレイン夫人の手になるドーナツを Brede Place のガーデンパーティで楽し気にたべるヘンリージェイムズ，常にクレインと共にいて，ハイドパークを散歩し，バルザックを論じ，又小説技法を論じ合うコンラッド，こうした場面がクレインの英国に於ける代表的な姿として残っている。

英国にあってクレインは本当に幸せな男であった。クレインの死後，10月8日に，クレイン夫人，Cora は，かつてクレインが，ニューヨークで寝食を共にした画家である友人のリンソン (Corwin K. Linson) に宛てて次のように手紙で述べている。

註⑤
“How I wish you could have seen him as the Squire at Brede Place. I used to call him ‘The Duke’ Stephen was so very happy there. I could not drag him to town or indeed off the place. We had a little park of 100 acres, and Stephen would take his morning ride within the fence, over the turf. It is such a joy to me now to remember that his last years here were so filled with comfort; with comfort brought by work. His life was filled with good. We had the two children of Harold Frederic, and there was always some poor-in-luck or-health chap staying with us . . . and no one, not even himself, felt it to be charity. His character the last year was wonderful!”

1899年のクリスマスパーティが Brede Place で開かれたこのパーティのクライマックスに，やがてこの若き天才の命を奪うはげしい咯血があり，出席していた，ウエルズ，フォード，ジェイムズ，コンラッドは，若き友の重い病をはじめて知ったのであった。クレインは Cora にさえ自分の病気はかくしていた。その後ドイツで1900年6月5日死ぬまでに，“Whilomville Stories”をまとめ，“The Upturned Face”を発表し，未完の“The O Ruddy”を書いている。先に英国における最後の三年と述べたが，実際には，コンラッドに金を工面して貰って出掛けた，Cuban battles があり，クレインの英国生活は約二年間であった。然しこの二年間に，クレインは若さをぬけた作家への道を開いていた。彼の傑作の多くは英国において書かれ，英国で出版された。英国において書かれた，すぐれた短篇には“The Open Boat”，“The Bride Comes to Yellow Sky”，“The Blue Hotel”，“Death and the Child”，“A man and-Some Others”，“The Five White Mice”，“The Price of Harness”，及び“The Monster”などがある。

[註]

I

注① Stephen Crane's Love Letters to Nellie Crouse, P. 57

注② Ibid., P. 64—65

注③ Cady “Stephen Crane”, P. 46

II

注① Williams and Starrett, ‘Stephen Crane’, P. 10

注② H. F. West, "A Stephen Crane Collection", P. 19

III

注① R. W. Stallman and Lillian Gilkes, Stephen Crane; Letters P. 95

注② New York Times Supplement (January 26, 1895) P. 22

注③ Edinburgh Review (April, 1898) 412—414

注④ the Illustrated London News Literary Letter; (July 25, 1896)

IV

注① Thomas Beer, "Stephen Crane", P. 217

注② Stallman and Gilkes, "Letters", P. 159

注③ Karl Harrman, "A Romantic Idealist—Mr. Stephen Crane" Literary Review IV.
(April 1900) 86

注④ New YorkTimes (May 1898), P. 10

注⑤ Corwin K. Linson, "My Stephen Crane", P. 109

後 記

日本におけるクレイン研究はまだ未開の分野に等しい。本稿も枚数制限もあり、クレインの文学活動にまで筆をのばせず、ただ表面を撫でたのみの感がする。

次回に機会を得たら、多くの共通点をもつクレインとコンラッドの関係についても、もって深く掘り下げてみたいし、クレインの作品の特質、そのアイロニー、及びシンボリズムについても書いてみたい。